

2025年度

一般入試 A 日程

国 語

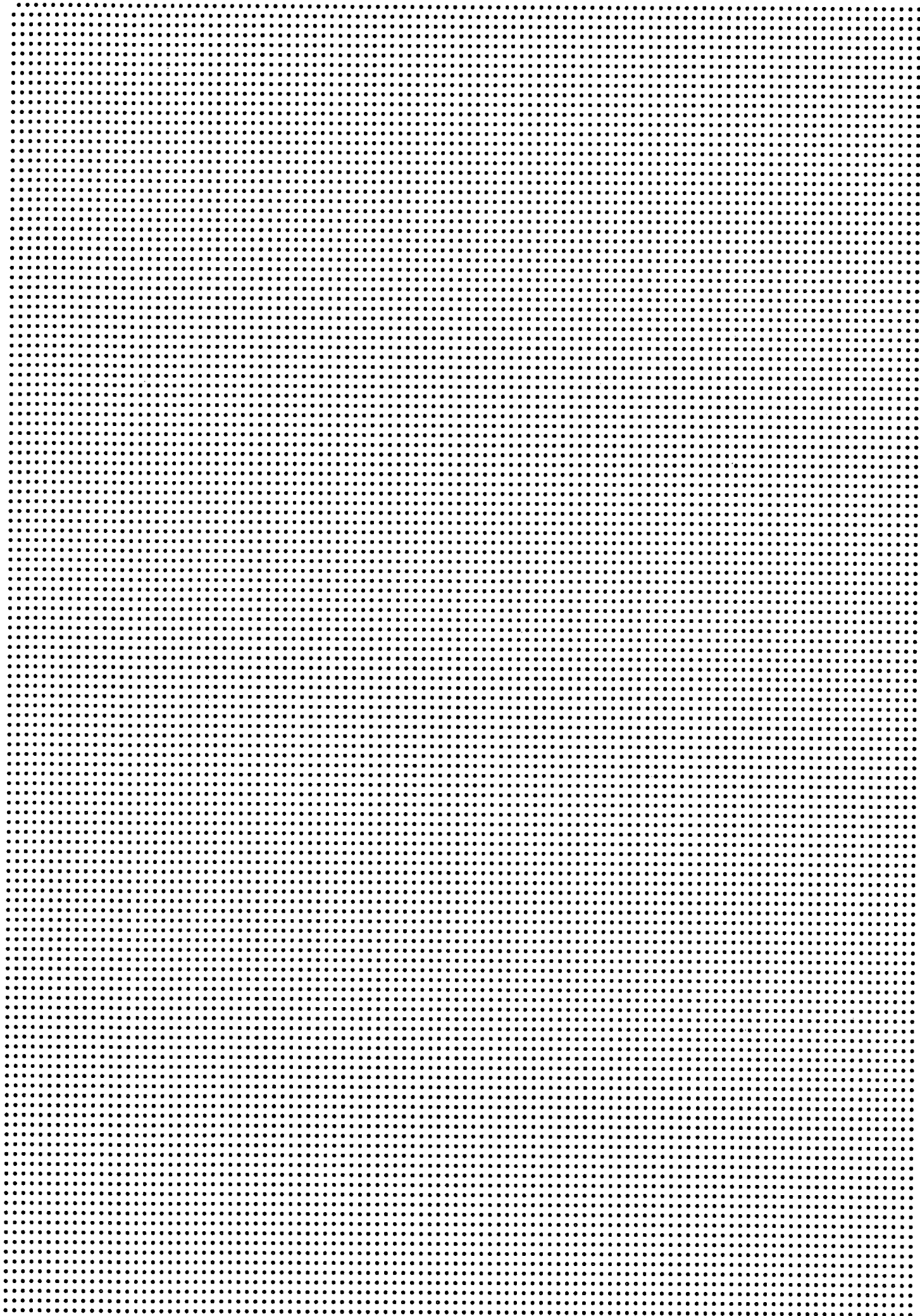
各学科受験生の解答する問題番号は次の通りです。

全員解答 ☐

選択して解答..... ☐ あるいは ☐

注 意

- 1 試験開始の指示があるまで開いてはいけません。
- 2 問題冊子は 17 ページあります。
- 3 解答用紙は 1 枚です。
- 4 試験開始と同時に解答用紙に座席番号と氏名を記入しなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入しなさい。
- 6 解答の記入にあたっては、正確かつていねいに記入しなさい。
数字や英字等が判読できない場合は、採点対象外とすることがあります。
- 7 問題冊子は持ち帰ってもかまいません。



以下の〔一〕〔二〕の設問に答えなさい。

〔一〕次の傍線部のカタカナを漢字に直し（二画一画でいいいに書くこと）、所定の箇所に記しなさい。

- ① 部屋のショウメイを暗くする。
- ② このニュースは世間のジモクを集めた。
- ③ スンカを惜しんで学び続ける。
- ④ あの曲のセンリツは美しい。
- ⑤ 不正疑惑のカチュウの人物を直撃する。

〔二〕次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

あなたは、誰かと対話をした経験があるだろうか。 会話ではなく、対話である。^A

よほど特別の事情がない限り、私たちは日常的に会話をしている。駅のキヨスクでチョコレートバーを買い、会社の守衛さんに挨拶し、職場で同僚と打ち合わせをして、昼食時にショートメールで遠方の友人と近況を伝えあい、帰宅して家族と今日のニュースについて話し合う。このどの場面でも、私たちは会話をしている。そのいくつかは軽いやり取りであったり、ただ楽しむためであったりする。他方、仕事の打ち合わせなどかなり真剣に、ときに厳しいやり合いをしなければならない。

だが、このどれもが会話であって対話ではない。

対話とは、真理を求める会話である。対話とは、何かの問いに答えようとして、あるいは、自分の考えが正しいのかどうかを知ろうとして、誰かと話し合い、真理を探求する会話のことである。ただ情報を検索すれば得られる単純な事実ではなく、きちんと検討しなければ得られない真理を得たいときに、人は対話をする。それは、自分を変えようとしている人が取り組むコミュニケーションである。

ショッピングや仕事でのやり取りは、自分の要望と相手の要望をすり合わせようとする交渉である。友人や恋人との会話は、よい関係を保

ち、相手を理解し、互いに話を楽しもうとする交流である。これらの会話は有意義かもしれないが、真理の追求を目的としてはいい。対話は、何かの真理を得ようとして互いに意見や思考を検討し合うことである。

私たちは日常生活の中で、ほとんど対話する機会がないのではないだろうか。それは、真理の追求が日常生活で行われなくなっているからである。だが実は、対話をしなければならない場面は、日常生活の中にも、思ったよりもたくさんあるのだ。

仕事場でも、ただ当面の与えられた業務をこなすだけではなく、仕事全体の方向性や意味が問われる場合、たとえば、「良い製品とは何か」「今はどういう時代で、どのような価値を消費者は求めているのか」「環境問題に対して、我が社は ^B 頬かむり^B をしているのか」など真剣に論じるべきテーマは少なくないだろう。家庭でも、子どもの教育をめぐって、そもそも子どもにとっての良い人生とはなにか、そのために何を学んでほしいのか、親と子どもとはどういう関係なのか、子離れするとはどういうことか、これらのことについて家族で話し合う必要はないだろうか。地域でも、どのような地域を目指せばいいのか、住人はどのような価値を重んじているのか、以前からの住人と新しく来た人たちはどう交流すればよいか。本当はこうしたことについて膝を突き合わせて対話する必要があるのではないだろうか。

人生に関すること、家族と社会に関すること、政治に関すること、地域での生活のこと、私たちはこれらのことをほとんど対話することなく、日々を過ごしてしまっている。そうした難しい議論は頭のいい人たちに任せて、自分たちはせせと働き、自分個人の生活だけを楽しめばいいのだ。かつてはこう考える人たちもいた。

a

、そうした態度はすでに限界を迎えている。私たちは、公共の問題にもう無関心ではいられないし、自分個人のあり方についても、いろいろな人から意見を聞いて考え直してみたいと思っているのである。

対話は面倒なことなのかもしれない。人の考えはそれぞれが異なっており、

b

、話が通じないと感じている相手と話し合うことは、ひどくストレスフルである。

c

、筆者が思い出すのは、もう三〇年近く前、ベルギーに留学したときの経験である。ルーヴァン大学のある教授による比較哲学のセミナーは、毎週のようにヨーロッパ各地からのゲストスピーカーを招いて、講演をしてもらい、そのあとに十分なディスカッションの時間を取るというスタイルのものであった。

ある週は、たしか、スペインの若手研究者によって（注）¹ アリストテレスについての発表があり、その後に質疑応答となった。筆者が驚い

たのは、その質疑応答である。古代ギリシャの古典研究の発表であるのに、ある質問者は現代哲学の（注）ジャック・デリダの主張を持ち出し、「これに対してアリストテレスならどう答えるのか」と質問した。ある南米からの留学生は、「アリストテレスの哲学は、南米の先住民の国々を侵略した時の擁護論として用いられたが、あなたはこれについてどう弁護するのか」と質問した。ナイジェリアからの留学生は、「アリストテレスの存在論は自分たちの民族で信じられている神の存在論と著しく異なるが、どちらが正しいと思うか」と問うた。日本では考えられない質問たちである。こうした質疑が毎回のように続いた。

発表者たちは、日本ならば苦笑してやり過ぎそうな質問に対しても真摯に答えようとしていた。この質疑応答に見られるのは、同じ土俵にあげることが不可能に思えるような、全く文脈の違う、まったく枠組みの違う考えであつても、あえて対峙させようとする姿勢である。哲学のテーマは人類に共通するテーマであり、そこに参加する者は、あらゆる違いを携えて（乗り越えてではない）、対話すべきだという態度である。それは、どのような参加者も迎え入れようとする、誰に対しても応答しようとする態度である。

とはいえ、やはり発表者たちはそれほどうまく応答できなかったように記憶している。しかし彼らの発表は、それまででは想像できないほど、空間的にも時間的にも広大な枠組みに投じられ、きわめて異質な意見に出会い、^D生産的な揺さぶりをかけられたのである。うかつにも当然視された文脈や慣習から見ればまるで異質であり、一見すると無関係とも言えるような、非常に異なった考え方の人たちが、まったく予想もつかない角度と発想から、突然に議論に参加してくる。その議論は、足元を掬うやつかいな質問に満ちており、唐突な意見が混乱に拍車をかけ、ひとつの問題をまとめ終わらないうちに、さらにお門違いと言いたくなるような主張がなされ、それまでの話の流れが揺り動かされる。まったくの混沌である。しかしこの混沌のなかでこそ、それでも皆で真理を追求しようとする態度のなかでこそ、素晴らしい創造性が見られるのである。おそらくベルギーという多言語の国家では、こうした議論の重要性がよく理解されている。

現代社会は、すべての人がそれぞれに真剣に取り組まなければならない共通の課題に直面している。そこで私たちが最初にしなければならないのは、こうした対話である。^Eたる状態のなかでも、皆で問題を共有して真理を追求する対話である。真理に直面しようとしな

人々、現実を見つめない人々は、かならず衰退していく。かりに議論の場で共通の結論を得られなくても、互いが思考を深めて、自分なりの意見を持ち帰って、それまでの自分のあり方を変えることができる。今の時代に求められているのは、粘り強い思考を伴った、異質な人々同

士の対話ではないだろうか。

二一世紀も二〇年ほど経った現在、私たちは岐路の時代を迎えている。この岐路をどう選択するか、私たちみんなが参加して、分野や立場を超えて、深く話し合う必要がある。人類を岐路に立たせているのは、環境問題と人工知能、そして社会の分断である。この三つを生み出しているのが、近代的な知である科学とその教育である。人間の発展を約束していたはずの科学とその教育が、人類にとって道を選ぶのが難しい岐路に立たせている。

（河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』による）

（注1） アリストテレス——前三八四年頃～前三三二年頃。古代ギリシアの哲学者。

（注2） ジャック・デリダ——一九三〇年～二〇〇四年。フランスの哲学者。

【設問】

一 傍線部A「会話ではなく、対話である」とあるが、次の1～5について、本文中の「対話」にあたるものと、本文中の「会話」にあたるものの組み合わせとして最も適切なものを、後のア～エの中から一つ選び、所定の箇所に記しなさい。

- 1 親子が、旅行先を決めるために、ガイドマップを比較しながら検討する。
- 2 会社員たちが、仕事の取引先と自社が仕入れる商品について真剣に交渉する。
- 3 小学生たちが、学校に通うことの意味について昼休みに意見を交わす。
- 4 国会議員たちが、自らの望む政策を実現するために議会で互いに主張し合う。
- 5 恋人同士が、真実の愛とは何かについて二人の考えを述べる。

- ア 1 会話——2 対話——3 会話——4 対話——5 会話
- イ 1 対話——2 対話——3 会話——4 会話——5 対話
- ウ 1 対話——2 会話——3 対話——4 対話——5 会話
- エ 1 会話——2 会話——3 対話——4 会話——5 対話

二 傍線部B「頬かむり」を言い換えた言葉として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、所定の箇所に記しなさい。

- ア 粗相
- イ 無茶
- ウ 横着
- エ 杞憂
- オ 看過

三 空欄

a	・	b	・	c
---	---	---	---	---

に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

- ア a かし——b もとより——c ところで
イ a かし——b とりわけ——c そこで
ウ a だから——b とりわけ——c ところで
エ a だから——b もとより——c そこで

四

傍線部 C 「日本では考えられない質問たち」とあるが、日本にこのような状況があるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、所定の箇所に記しなさい。

- ア 議論の場では、互に関心が違ったり、異なる問題に取り組んだりする者たちが集うことがないから。
イ 議論の場では、ベルギーのような多言語国家と違って、すべての参加者が共通の言語で討論を行うから。
ウ 議論の場では、参加者が意見の対立を避けて相手の主張に合わせようと譲り合う傾向があるから。
エ 議論の場では、異なる学問上の背景を持った相手と真剣に質疑応答する機会が少ないから。

五

傍線部 D 「生産的な揺さぶりをかけられた」とはどういうことか。この説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、所定の箇所に記しなさい。

- ア 想定されなかった発言によって議論の秩序が乱されたことで、新たな発見が生まれるきっかけになったということ。
イ 様々な考えを持つ参加者たちが乱入することで、議論は空回りしながらも、問題が完全に解決されたということ。
ウ 一見すると関係ないと思われる意見や質問によって議論が停滞することもあったが、最終的に合意が形成されたということ。
エ 突拍子もない質問によって発表者たちがたじろぐ場面もあったが、穏当に場を収めることができたということ。

六 空欄 E に入る語を本文中から漢字二字で抜き出して記しなさい（句読点・記号も字数に含む）。

七 筆者は現代社会に求められる「対話」とはどのようなものであると述べているか。六〇字以内で説明し、所定の箇所に記しなさい（句読点・記号も字数に含む）。

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

カズオ・イシグロは本当に不思議な作家である。

すぐく乱暴な言い方をすれば、^Aイシグロはいつも「同じ」である。「同じ」なのに、いつも「ちがう」のである。

イシグロの長篇小説はすべて一人称で——つまり「わたし」で——書かれている。なるほど、この「わたし」と名乗る人物たちはいつも異なる。「わたし」は未亡人かもしれないし、引退した画家かもしれない。元執事かもしれないし、ピアニストかもしれない。私立探偵かもしれないし、弁護士かもしれない。それぞれの作品の舞台は、国もちがえば時代もちがう。しかしこの異なる相貌の「わたし」が基本的には同じことをしているという印象を読者は受ける。では何をしているのか？「語る」ことである。

一人称の小説において、作品世界で起こっているすべての出来事は、「語り手」の「声」を通過しなければ、私たちには決して見えない。

^B読者は語り手の視線を通して世界を眺めることを余儀なくされる。物語が魅力的であればあるほど、「語る」行為そのものは、それが記述する一連の出来事や行動および思考や感情の流れの背後に退いて、私たちの視界から消える。実際、そのようにして「語り」を忘れさせてくれる一人称の小説はいくらでもある。

ところがイシグロにおいては、やや事情が異なる。イシグロを読んでいると、「語る」ということ自体の^C肌理が目につきはじめる。そして、それが私たちに与える、あまり心地よいものではない感触が気になってくるのである。どうしてこの「わたし」は語るのか？どうしてこんな語り方なのか？

^Dイシグロの作品群を貫く中心的な主題があるとすれば、それは語り手の「記憶」の曖昧さ、より正確に言えば、その記憶のなかで知覚され、認識された「現実」の不確実性である。イシグロの語り手たちはみな、身近に起こった過去の数々の出来事を、「語る」ことによって再構成しようとする。過去を語ること、語らずにはいられないことには、重なりあうふたつのことが前提とされている。ひとつは、現在の自分のことがよくわからないということ。そしてもうひとつは、私たちのいまこの瞬間の「自己」は、過去における「自己」との「連続性」によって構築されているという確信である。^A自己同一性とはこの「連続性」のことである。「起源」というものは、定義からして「過去」にしか位置づけられない。過去を問い直すことの根幹には、アイデンティティの探究が必ず合意されていると言える——イシグロ作品の「語り手」

たちがやっているのは、いつも ^E「これ」なのである。事実、柴田元幸氏のインタビューに答えてイシグロは「今の自分は何者なのか？ そう問いつけなくてはいけない」（『ナイン・インタビューズ』）と言っている。この問いかけは、アイデンティティの揺らぎを覚えるときに私たちの誰もが少なからず行っていることではないだろうか。

^a 言うまでもなく私たちは誰ひとりとして同じではない。イシグロは語り手の回想を通じて、同じ問いかけを共有しつつ、まったく異なる一人ひとりの人間の生を浮かび上がらせる。

^b 作家イシグロのすごさとは、各作品に現われる中心的モチーフが同じだと感じられるにもかかわらず、そのつど固有のリアリティの厚みを備えたまったく別個の「語り手」を創造する。というよりも「語り手」になる能力——類稀な「他者化」の能力——にあると言える。ふつう一人称の語りの場合、語り手の視点に「作者」の思考や感情は投影されがちである（たとえば「私小説」を考えてみればよい）。

^c イシグロの場合、作者イシグロの姿は完全に消えている。その気配はどこにも感じられない。それくらい見事にイシグロは語り手の仮面をかぶっている。いや、仮面になりきっているどころか、その仮面にイシグロが乗っ取られているかのようだ。

『浮世の画家』において、イシグロが選んだ仮面は、小野益次という引退した日本人画家である。この小説では、戦後間もない日本が舞台となっている。小野は、娘の紀子の縁談が一度結婚寸前で破談になってしまったことの理由がどうやら自分の過去に関係していることに気づいている。そこから戦前、そして戦中へと思いを馳せ、数多くいた弟子たちとの関係、幼年期、自らの修行時代などを回想していく。ところがその語りを聞いているうちに、読者は ^F「どうも大切なことがぼやかされているような気がしてくる。「人はときどき、自分で思っている以上に世間から高く買われていたことに気づいて驚くものだ」とか「すべては何年も前に起こったことだから、その朝わたしが正確にそう言ったと断言するわけにはいかない」、「その晩の記憶に限って妙に不明瞭なところがある」といった言い方にうかがえるように、他者の目に映った自己像と自らがいただく自己像とのズレや記憶の不確かさを白状する小野の語り口は一見誠実に見える。しかし彼の言葉に耳を傾ければ傾けるほど、決定的に重要なことが故意に言い落されているような印象は深まるばかりである。

例えば弟子たち——信太郎と黒田——との関係にしても、訣別の理由ははっきりと語られない。また、小野は自分の過去を誇らしく思うと言うわりには、いったいなにを誇りにしていたのかは言明されない。そして小野は、自分が過去に犯した過ちを認めると述べた上でこう続ける。「過去の責任をとることは必ずしも容易なことではないが、人生行路のあちこちで犯した自分の過ちを堂々と直視すれば、確実に満足感

が得られ、自尊心が高まるはずだ。とにかく、強固な信念のゆえに犯してしまった過ちなら、そう深く恥じ入るにも及ぶまい。むしろ、そういう過ちを自分では認められない、あるいは認めたくないというほうが、よほどはずかしいことに違いない」。ところが、その罪とは具体的にどのようなものだったのかは一切言及されないのである。小野は何かを読者の目から遠ざけようとしている。しかし隠そうとする仕草自体が隠されているものをいっそう際立たせずにはおかない。イシグロ独特の技法とは「普遍的で明確なテーマを、いわば現実の陰影だけで浮かびあがらせる」ことであるとは、『浮世の画家』の訳者である飛田茂雄氏の言葉だが、付言すれば、

G

。『浮世の画家』において

は、この「語り」がはらむ「陰影」こそが、「本体」、つまり小野益次という人間とは何者かをあらわにするのである。

(小野正嗣『浦からマグノリアの庭へ』による)

【設問】

一 傍線部A「イシグロはいつも『同じ』である」とあるが、イシグロの長篇小説において、どのような点が「いつも『同じ』」なのか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア すべて一人称で書かれており、「わたし」と名乗る人物たちの立場や職業がいつも異なるものの、その過去が謎めいた設定であることが同じ点。

イ 「わたし」と名乗る人物は、未亡人や引退した画家、元執事やピアニスト、私立探偵や弁護士など異なる相貌を持っていることが同じ点。

ウ すべて一人称の「わたし」で書かれ、その「わたし」の相貌はそれぞれ異なり、作品の舞台となる国や時代は違うが、「語る」とが同じ点。

エ すべて一人称で書かれており、作品の舞台となる国や時代が違い、相貌も異なるが、「わたし」と名乗る同じ人物が「語る」点。

二 傍線部B「読者は語り手の視線を通して世界を眺めることを余儀なくされる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 一人称の小説においては、作品世界で起こるすべての出来事が「語り手」の「声」で語られるから。

イ 物語が魅力的であるほど、「語る」行為そのものは、読者の視界から消えるものであるから。

ウ 一人称の小説は、記述される出来事や行動、思考や感情の流れの中にある「語り手」の「声」を聴くことが醍醐味であるから。

エ 物語とは本来、「語り手」の視線を、読者が追い求めるように書かれるものであるから。

三 傍線部C「肌理」とあるが、このことばを誤用している例を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 空気が乾燥し、肌の肌理が荒れてしまった。

イ 発掘された鉱物は、大理石のような肌理を持っていた。

ウ 旅先のホテルで、肌理細かなもてなしをうけた。

エ 大勢の中においても、彼女は人の目に肌理が立つ。

四 傍線部D「イシグロの作品群を貫く中心的な主題」の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 「語り手」たちの「語る」行為を私たちの視界から消し、どうして「わたし」は語るのかを曖昧にさせる。

イ 「わたし」の記憶が曖昧なため、過去の数々の出来事が非現実的な脚色を加えて描かれる。

ウ 登場する「わたし」の過去の記憶は曖昧であり、過去を語ることができない「語り手」たちとして現れる。

エ 「語り手」たちは、記憶の曖昧さを含む過去の出来事を「語る」ことで再構成しようとする。

五 傍線部 E 「これ」とはどのようなことを前提として、なにをしているということか。解答欄にあらうように、それぞれ十一字と七字で本文中の語句を抜き出し、所定の箇所に記しなさい（句読点・記号も字数に含む）。

六

空欄 a

c

に入るべきことばの組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア a だから——b したがって——c たしかに

イ a そして——b したがって——c ところが

ウ a そして——b たとえば——c ところが

エ a だから——b たとえば——c たしかに

七

傍線部 F 「どうも大切なことがぼやかされているような気がしてくる」とあるが、これをわかりやすく言い換えた部分を、本文中から四〇字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を所定の箇所に記しなさい（句読点・記号も字数に含む）。

八

空欄 G

に入る内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 「過去」を「語る」ことは「陰影」を見つけることである。

イ 「過去」を問い直さない限り、「自己」はわからない。

ウ この「現実」に、もはや「語り」は不要である。

エ この「現実」は「語り」によってのみ構成されている。

九

この文章の内容と合致するものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア イシグロの長篇小説は、「語り手」の視線を通して私たちに一連の出来事や思考の流れを伝えるという、典型的な一人称の小説の形式にのっとって書かれている。

イ イシグロの作品は、認識された「現実」の不確実性に特徴を見せるが、それは同時に「現実」を生きる「自己」と過去との「連続性」に対する疑念を意味している。

ウ イシグロの能力は、各作品の中心的モチーフが同じであろうとも、まったく別の「語り手」になるところ、語り手の仮面に乗っ取られたかのような「他者化」にある。

エ イシグロは、「作者」の思考や感情をその作品に投影しながらも、「語り手」を生み出すことで見事にその気配を消して見せるところに、他の作家にはないすごさがある。

三

次の文章は、『源氏物語』空蟬卷の一節である。光源氏はかつて関係を持った女君の寝所に忍びこんだが、人妻である女君は装束だけ脱ぎ残して逃げ出してしまう。女君の弟（小君）とともに、自邸に装束を持ち帰った光源氏は、弟に不満を述べながら床についた。以下は、それに続く場面である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯^{すずり}急ぎ召して、さしはへたる御文^{ふみ}にはあらで、^{（注1）} 畳紙^{たたうがみ}に手習^{てならひ}のやうに^① 書きすさびたまふ。

A 空蟬の身を変へてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな
と書きたまへる^Bを、懐^{ふところ}に引き入れて持^いたり。^{（注2）} かの人もいかに思ふらむと、いとほしけれど、かたがた思ほしかへして、御ことつけ
もなし。かの薄衣^{うすぎ}は、^{（注3）} 小桂^{こうき}のいとなつかしき人香^{ひとが}に染めるを、身近くならして見^みあたまへり。ⁱⁱ

小君^{（注4）} かしこに行きたれば、姉君待ちつけて、^D いみじくのたまふ。^② あさましかりしに、とかう紛らはしても、^{（注5）} 人の思ひけむこと避^さりどころなきに、いとなむ^③ わりなき。いとかう心幼きを、かつはいかに思ほすらむ」とて、恥づかしめたまふ。左右に苦しく思へど、かの御手習ⁱⁱⁱ 取り出でたり。^E さすがに取りて見たまふ。かのもぬけを、いかに、^{（注6）} 伊勢^{あま}をの海人^{あま}のしほなれてや、など思ふもただならず、
いとよろづに乱れて。

^{（注7）} 西の君も、もの恥づかしき心地して渡りたまひにけり。また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめてゐたり。小君の渡り歩^{あり}くにつけても、胸のみ塞^{ふさ}がれど、御^④ 消息^{しそく}もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心に、ものあはれなるべし。

^⑤ つれなき人も、さこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

空蟬の羽^はに置く^F 露^この木隠^{かく}れて忍び忍びに濡るる袖かな

(注1) 畳紙——ふところに入れて携帯する紙。

(注2) かの人——女君の義理の娘。女君の傍で寝ていたため、女君と間違えた光源氏はそのまま関係を持ったが、その後手紙も送らなかつた。

(注3) 小桂——丈がやや短い上着。

(注4) かしこ——空蟬がいる邸。

(注5) 人の思ひけむこと避りどころなきに——周囲が自分と光源氏の仲を疑うことは避けられないので。

(注6) 伊勢をの海人のしほなれて——「鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほなれたりと人や見るらむ」(『後撰和歌集』藤原伊尹^{これまさ})を踏まえた表現。

(注7) 西の君——前出の「かの人」と同じ人物。

【設問】

一 二重傍線部①～⑤の語句の意味として最も適切なものを、それぞれの選択肢ア～エの中から一つずつ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

- | | | | | |
|------------|---------------|------------|----------------|---------------|
| ①「書きすさび」 | ア 何度も書き直し | イ 怒りを込めて書き | ウ 手本のようにきちんと書き | エ さらにさらさら書き流し |
| ②「あさましかりし」 | ア 浅いご縁だった | イ 驚きあきれた | ウ 嬉しかった | エ 軽蔑していた |
| ③「わりなき」 | ア どうしようもなくつらい | イ 矛盾している | ウ 愛おしい | エ がっかりする |
| ④「消息」 | ア 息抜き | イ 癒やし | ウ 見舞い | エ 便り |
| ⑤「つれなき」 | ア つまらない | イ 薄情な | ウ 恋しい | エ 怒っている |

二 和歌A「空蟬の身を変へてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」の説明として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所^①に記しなさい。

- ア 「空蟬の身を変へてける」は、女君が装束を脱ぎ捨てたことを、蟬が抜け殻を残して姿を変えることにたとえた表現である。
- イ 「なほ」は、女君に冷たくされても、依然として光源氏の思いに変化がないことを表している。
- ウ 「がら」は、女君の「人柄」の「柄」と蟬の抜け殻の「殻」との掛詞となっている。
- エ 「なつかしきかな」には、辛い現実を忘れて思い出に浸る気持ちが込められている。

三 傍線部B「る」と文法的に同じものとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を所定の箇所^②に記しなさい。

- ア 立ち別れ因幡の山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰りこむ
- イ 松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、
- ウ かの大納言、いづれの船に乗らるべき。
- エ 鳶^{とび}みさせじとて、縄をはられたりけるを、
- オ もし、見たまへ得ることもやはべると、

四 波線部i「持たり」、ii「見たまへり」、iii「取り出でたり」の主語として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を所定の箇所^③に記しなさい。ただし、同じ記号を重複して用いてもよい。

- ア 光源氏 イ 女君 ウ 小君 エ かの入道

五 傍線部C「かの薄衣」と同じものを指す箇所を、本文中から五字で抜き出し、所定の箇所に記しなさい。

六 傍線部D「いみじくのたまふ」は、光源氏のために立ち働く小君を、姉の女君が叱責したことをいう。これとほぼ同じ内容を表す箇所を、本文中から八字で抜き出し、所定の箇所に記しなさい。

七 傍線部E「さすがに取りて見たまふ」とあるが、この内容について説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 光源氏は、冷淡な女君を憎らしく思っているが、それでも女君の脱ぎ捨てた装束を眺めずにはいらなかった。

イ 光源氏は、女君がつかないのは自分に原因があると考えて、女君に送ろうとした手紙を何度も読み返した。

ウ 女君は、光源氏を拒絶する姿勢を崩さないものの、やはり光源氏が女君を思っている様子を見てしまった。

エ 女君は、内心では光源氏に憧れているので、光源氏が文字を書く練習をしている様子を一応確認することにした。

八 傍線部F「露」が指すものは何か、漢字一文字で所定の箇所に記しなさい。

九 『源氏物語』よりも前に成立したとされる作品として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を所定の箇所に記しなさい。

ア 『保元物語』

イ 『平家物語』

ウ 『竹取物語』

エ 『宇治拾遺物語』

オ 『雨月物語』

